

調査月報

【通信機器】低空飛行が続く光ファイバ市場

光ファイバ市場の低迷が続いている。光ファイバ需要は、IT・テレコムバブルの2000年前後に急増したものの、2002年には急減し、2003年も横這い程度にとどまった(図)。この間、価格も下落傾向で推移し、金額ベースでは落ち込みがさらに大きくなっている。

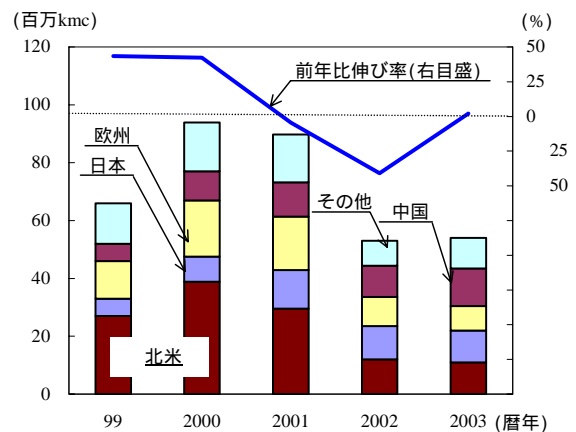
これは、欧米やわが国など先進国市場の不振が大きい。光ファイバは、通信回線に利用され、敷設地域に応じて、大都市間を結ぶロングホール向け、都市域内を結ぶメトロ向け、電話局から加入者宅までを結ぶアクセス向けに大別される。先進国では、IT・テレコムバブル時に、大口のロングホール向けを中心に既存の銅線を代替する形で通信回線の光ファイバ化が進められた結果、通信回線容量の大幅な過剰に陥った。このため、ここ数年、先進国における光ファイバ需要は、ロットの纏まらないメトロやアクセス向けに限られており、減少傾向を強いられているわけだ。

今後についても、光ファイバ市場は、低空飛行が続く虞が強い。中国で新規参入が相次ぐなど厳しい競争が続くなかで、価格の軟調推移が予想されることから、市場の先行きは需要の回復ピッチにかかっている。この点、従来は、「先進国市場の持ち直しから年率10~15%のピッチで回復傾向を辿る」との見方も少なくなかったが、実際には、以下のような事情から、微増程度にとどまりそうだ。たしかに、中国やその他地域では、通信インフラの整備を受けて増

加傾向を辿ろう。しかしながら、先進国では、メトロやアクセス向けの光ファイバ敷設余地が狭まっていくうえ、期待されていた増強需要も後ズレする公算が大きい。すなわち、先進国における光ファイバの利用率は、足許では1~4割にとどまるが、今後、個人に加え産業界でもネットワークの活用が一段と進むなかで通信回線を通る情報伝達量の急増が予想され、回線容量は早晚逼迫するとみられていた。しかし、このところ、光の波長を制御することで光ファイバの情報伝達量を数~数十倍にも引き上げる画期的な通信装置が普及し、当面は光ファイバを増強せずに対応できそうな情勢となっている。こうしたことから、世界全体の需要は年率5%増程度の伸びにとどまる公算が大きい。

参入各社は、IT・テレコムバブル崩壊以降、大規模なリストラに追われてきたが、今後も、厳しい状況が続くことになりそうだ。(H16.10.7 平野 剛士)

図：光ファイバの世界需要推移



(資料)業界誌などをもとに当室作成